



国体だより その4



『ふくろうのマスコット』が贈られました

5月9日、国体で高梁を訪れる選手たちへのお土産品として、高梁北・高梁南両婦人会の会員の皆さんが作った『ふくろうのマスコット』千個が寄贈されました。

マスコットは、ハギレを利用して作られており、高さ4cmほどのふつくらとした形で色とりどり。メッセーじカー

ドとともに、一つひとつ丁寧に袋詰めされています。

高梁北の丸池宣子会長、高梁南の川上壽子会長が市役所を訪れ、「福を呼ぶ鳥といわれる『ふくろう』のマスコットを持ち、選手たちが試合でよい成績を出せるようにと心を込めて作りました」と、実行委員会会長である秋岡市長に手渡しました。

ソフトボール大会で中学生・高校生が実地練習

5月21日・22日、神原スポーツ公園・高梁運動公園を会場として、『第51回全日本総合男子ソフトボール選手権大会』、『第2回全日本一般男子ソフトボール選手権大会』の県予選会が行われました。

この大会の開会式では、国体に向けた式典補助員の実地練習として、プラカード持ちなどを務める中学生が参加しました。また、競技補助員を務める高校生も試合に参加し、実際にグラウンド整備などを行いました。

高梁市実行委員会総会が開かれました

5月23日、旧高梁市と旧成羽、旧川上町の国体実行委員会組織を再編した「晴れの国おかやま国体高梁市実行委員会」の総会が高梁市文化交流館で開かれました。

関係者約160人が出席し、本年度の事業計画・予算案など4議案が提案され、原案通り可決されました。

秋季大会開催100日前イベント・合火イベント

とき 7月10日(日)
開場 12:10～ 開会 13:00～

ところ 高梁総合文化会館

入場無料

●記念講演 (13:30～)

演題 「努力は裏切らない」

講師 女子ソフトボール日本代表チーム前監督

うつぎ たえこ
宇津木 妙子さん

シドニー五輪で銀メダル、アテネ五輪で銅メダルを獲得した女子ソフトボールチームを率いた宇津木妙子さんにご講演いただきます。

また、アテネ五輪代表選手の坂井寛子さん(投手)、伊藤良恵さん(内野手)も来場されます。

●合火式 (15:00～)

オリンピックの聖火にあたる国体の炬火。この炬火の種火として市内の各小学校で採火された火を、高梁市の火として一つにします。



方谷先生を訪ねて

3

元締時代 — 財政をたてなおす —

山田方谷を取り立て有終館の学頭にまで用いた藩主板倉勝職は嘉永二（一八四九）年八月に亡くなりました。恩義を強く感じていた方谷は五十日間喪に服し、隠居を願ひ出ました。ところが十一月、新しい藩主の勝静に江戸藩邸に呼び出され、藩の元締と吟味役という藩財政を一手に担う役を命じられたのです。困惑した方谷は固く辞退しましたが許されず、十二月末に遂に引き受けることになったのです。方谷四十五才の時

です。しかし若い婿養子の勝静と農民出身の学者の方谷による藩政の実施に対する藩士たちの不安と反感は強く、「御勝手に孔子孟子を引き入れて、なおこのうえに



藩主 板倉勝静肖像

空にするのか」という狂歌が詠まれたほどです。しかし、勝静は藩財政をたてなおすには方谷の起用しかないという強い意志でその反対に屈せず、方谷への批判は一切許しませんでした。この藩主の信頼に答えるため、方谷は藩の会計簿など必要な資料を徹底的に調べて現状を的確に把握し、藩のたてなおしの策を作りあげ、藩主に示して実施して

いきます。彼の藩政改革の要点をあげると、一、上下節約 二、負債整理 三、藩札刷新 四、産業振興 五、民政刷新 六、文武奨励でした。

このうち、早急な改革を要した、一〜三についてまず述べますと、

一、上下節約 松山藩は過去水谷氏の断絶で大きく領地を失って名目は五万石ですが実質二万石弱で莫大な負債を抱え辛苦していました。藩主勝静は嘉永三年六月、松山に帰藩すると直ちに家臣を集め儉約令を命じ、期限を定めて藩士の給与の一割カットを断行しました。衣服は綿織物、櫛などは木・竹に限り、足袋をはくのは十月より四月、飲食は一汁一菜、結髪・家政は人手を借りないなど厳しくぜいたくを戒めていました。さらに奉行・代官などへのもらい物はすべて役所に持ち出し、もらい物は入札で希望者が買う。巡郷の役人へは酒一滴も出せずに及ばず、役人への接待はせず、

二、負債整理 十数年前に起きた二度の城下の火災のためか新しい借財が多く、十両に達し、年収の二倍にも及んでいました。その上利息が年間八、九千両になりました。そこで方谷は綿服で大坂に出かけ、金主の商人に藩の帳簿を示して実情を話し、これ以上の借銭はしないことを約束した上で従来の負債は新旧にに応じて十年から五十年で返済したいと申し出ました。借金の一部帳消しや、利息の減免を受けることもあって、大量の借金を大幅に減らすことができました。また大坂の蔵屋敷を解消して、年間一千両の経費削減に成功しただけでなく、藩米の販売権を藩が掌握して、藩財政を有利に展開しました。

三、藩札刷新 天保時代に大量に発行した新五匁札がきっかけとなって松山藩の藩札の評判は悪く、にせ札も出まわり信用はなくなっていました。方谷は就任した嘉永三年、発行時積み立てた準備金すべて使って藩札を買い上げ、未使用のものも含めてこれを焼却しました。焼却は嘉永五年九月五日、高梁川の下町対岸近似川原と定めて町民に触れを出し、多数の見守るなか、朝八時から夕四時まで、元締役をはじめとして関係役人が総出勤して処分しました。かわりに新しく永銭を発行、両替を励行しました。永銭には百文、十文、五文札があつてそれぞれ、十枚、百枚、二百枚で金一両に引き替えるとの明文が裏に記されていたので藩札の信用は回復し、藩内はもとより他藩にまで流通するようになり、明治維新まで使用されています。

（文・児玉亭さん）
— 来月号につづく —



藩札